

■(野々口)大國隆正 国学者。国学四大人の後を受け、日本中心思想の学風を樹立、明治初頭の神祇行政の礎となる。

おおくにたかまさ

ワクマン来日・1792＝

江戸桜田の津和野藩邸で、藩士今井秀馨の子に生まれる。

松平定信引退1793＝1歳：

宣長没・・・1801＝9歳：

幼い頃、父から以呂波と五十音図を学んで、音韻学を志すようになり、

ツバ船狼藉・1807＝15歳：\_平田篤胤に入門して神道学や古学を修め、

\_また昌平黌に学んで業を古賀精里に受け、

浮世風呂・・・1809＝17歳：\_昌平黌の舎長となる。長島藩主増山雪斎に絵画を、菊池五山に詩を学ぶ間、本居宣長の音韻学に精通し、

・・・1810＝18歳：\_昌平黌を辞め、宣長門人の村田春門に入門し、古学詠歌を学ぶ。

杉田玄白没・1817＝25歳：家を嗣ぐ。父の秀馨は祐筆の役でもあった為、隆正も書法に志があった。

水野忠成老中1818＝26歳：\_長崎に遊学し、長崎通詞吉雄権之助に接して、以後数ヵ月、西洋の理学やインドの梵書をも涉猟。

群書類従完結1819＝27歳：\_また書法を清国人に問い、ついで津和野を過ぎて江戸に還り、

\_皇朝諸名家の筆跡を学んで一家をなし、もっぱら神代の古事や五十音図に係る諸書を攻めて、神代の古事は自国だけでなく広く地球全体に至る神理で皇統の無窮は偶然ではないことを確信、「古伝通解」および「倭屋一家言」などの稿を起すに至る。

日本外史・・・1827＝35歳：\_藩命により大納戸武具役についたが、

シボク事件・1828＝36歳：\_故あって亡命、今井氏のもの姓野々口に復する。

富嶽三十六景1831＝39歳：\_父秀馨が死去して家運傾き、

高島砲術・・・1834＝42歳：\_再度の火災に罹って、著書や器財を悉く失ったので、妻子を親類に託し、

滑稽+人情本 1835＝43歳：\*单身大坂に赴いて精励、以来国学を京摂の間に講じて、いわゆる“本教”“本学”の名を高からしめ、

・・・1836＝44歳：\_播磨小野藩主一柳侯に招かれ、

大塩平八郎乱1837＝45歳：\_藩校(帰正館)を創設して、

\_藩士の子弟を教導すること5ヵ年。

天保改革始・1841＝49歳：\*京都に家塾(報本学舎)を開き、尊皇敬神と誠を核とする教を説き、それを“本教”“本学”と名づけて京坂の地に講じて、名声を得る。

阿部正弘首座1845＝53歳：

孝明天皇・・・1846＝54歳：

・・・1848＝56歳：\_阿部正弘に招かれ、姫路藩福山藩で皇道を教授。「倭魂」2巻を著して、藩儒江木鰐水の反発にあうも、危うく罪を得を免れる。

尊徳報徳論・1851＝59歳：\*津和野藩主亀井菴監が隆正の学識を嘉賞して臣籍に復せしめた恩義に感謝し、以後、藩校養老館に講義し、国学教師岡熊臣とともに、幾多の人材を養成する。

ペリー来航・1853＝61歳：\_ペリーが浦賀に来航した年には、報国の志念を燃やして多くの著書を出し、活躍。

安政大地震・1855＝63歳：福山に滞在し誠之館皇学寮で皇学を講じる。

桜田門外変・1860＝68歳：

生麦事件・・・1862＝70歳：\_石見国大国村で、大国主命の古跡を発見し、その神社を再建させるとともに、姓を大国と改める。

禁門の変・・・1864＝72歳：

明治維新・・・1868＝76歳：\*維新に際し、国学の理論的指導者として福羽美静・玉松操らを育てる。徴士となって内国事務局権判事に任ぜられ、神祇事務局に移り、

廃藩置県・・・1871＝79歳：\_宣教師御用掛となったが、病没した。

著書は「本学挙要」「駅戒問答」「文武虚実論」「直毘靈補注」など百有余種に上る。明治初頭の神祇行政は津和野藩主従の奉公を多とすべく、隆正の構想に基づくところ少なくない。